

獨協大学における通訳翻訳関連科目についての実践報告

永田 小絵

(獨協大学国際教養学部)

Abstract

There are two kinds of undergraduate classes related to interpretation & translation (I/T) in Dokkyo University: (1) The classes devoted to both interpreter training and improvement of foreign language competence and (2) the classes devoted solely to the training of interpreting and translation. However, there are very few classes which teach the theory of I/T. This paper mainly discusses I/T education as liberal arts, introducing the classes of English, Spanish, Korean, and Chinese. It will also make reference to the reaction of the students in these classes. Lastly, the author will talk about some issues related to I/T education at the undergraduate level in the future.

1 はじめに

近年、学生の実務志向に合わせて、日本国内の多くの大学で通訳翻訳を授業に取り入れるようになってきた。大学の学部における通訳翻訳教育では、主に(1)第二言語の運用力を向上させる目的で通訳訓練手法を導入する、(2)通訳翻訳の実践的な能力を養成する、の二つの方向性がある。

第二言語の運用力向上を主な目的として通訳訓練手法を取り入れる試みはかなり以前から行われており、音声テキストを用いるクイック・レスポンス、リピーティング、リプロダクション、シャドーイング、文字テキストを用いるスラッシュ・リーディングなどがその代表的なものである。これらは外国語学習に有効であるとされてきた「直接教授法」とは異なり母語を介在させる学習法だが、伝統的な「文法訳読法」とは異なるアプローチが目新しく感じられること、一つのテキストを様々な形で反復練習できること、学生の心理的負担が少ないことから導入しやすく、さらに母語を介在させることが第二言語の運用能力向上に有効であることを実証するものともなっている。

通訳翻訳演習では実際の逐次通訳・ウィスパリング・同時通訳や様々なテキストの翻訳も行われる。通訳ブースを備えた教室を有する大学も少なくなく、多くの通訳実務経験者が大学の

教壇に立つようになってきてもいる。

しかし、いずれにしても通訳翻訳関連科目は大体において個別言語の運用力(聴く・読む・話す・書く+訳すの五技能)を伸ばすことを目的としており、教養科目としての「通訳翻訳学」はまだそれほど多くの大学で講義されていない。教養系の講義科目が見当たらないことは通訳翻訳が独立した学問とはみなされていないことを物語っているのではないだろうか。かつて通訳翻訳は実学であってアカデミズムにはなじまないものとみなされてきたが、「通訳翻訳学」が学問として認知されるためには、一般教養科目として体系だった概論の講義があつて然るべきだと考える。

本論では筆者が担当する通訳翻訳関連科目について、全学・学部・ゼミの各段階での現状を報告し、さらに今後の大学における通訳翻訳教育について検討したい。

2 獨協大学全学共通カリキュラム「ことばと思想 1(通訳・翻訳論)」

「通訳・翻訳論」(科目名)は定員 300 名ⁱ、全学部ⁱⁱ 全学年向けの教養科目で、筆者は 2004 年からこの科目を担当し、今年度(2016 年度)で 12 年になる。全学共通カリキュラム「ことばと思想 1」(科目群の名称)に分類される。この科目群は到達目標として「ことばと思想に関する学問分野について、副題に示したテーマをもとに、21 世紀型市民にふさわしい概括的な知識を習得し、今後の複雑な国内および国際情勢に対処していく方法について、論理的かつ創造的思考を持って対応できるようにする」ことを掲げている。「通訳・翻訳論」は講義科目として「通訳、翻訳についての知識を深めることを目的とし、学期前半では翻訳と通訳の発展の歴史、翻訳の規範などを通じて翻訳・通訳の社会における役割と貢献について学び、学期後半では通訳という職業について理解を深めるとともに外国語学習に役立つ通訳訓練法を紹介する」ことを目標とした。

通訳翻訳といえば、これまではとすれば実践面が強調され、個別言語の枠内で第二言語学習に応用されることが多かったが、通訳翻訳学を他の学問分野と同様に社会における一種の人間の営為を研究するものとしてとらえれば多角的な研究が可能な学際的なテーマになりうる。通訳翻訳がかかわる多くの事象に光を当て、一般教養科目として全学の学生が興味を持てるような講義内容にすることを目指してシラバスを作成したのがこの科目である。全学部全学年に開かれた科目であるため、個別言語に限定しない講義を行う必要がある。また、「概括的な知識を習得し」、「国内および国際情勢」に「論理的かつ創造的思考」で対応できる、という科目群全体の目標のもとに「通訳・翻訳論」で扱う内容を決定しなければならない。外国語を専攻する履修者のごく一部は業務として通訳や翻訳を行うことになるかもしれないが、むしろそれは例外であろう。大半の学生は最終的には自らが通訳翻訳を行うよりは通訳翻訳サービスを利用する立場になるであろうことを考え、将来の通訳翻訳ユーザー教育にも配慮した内容とした。

2.1 授業計画、使用教材と教科書

以下は 2016 年度秋学期(1 学期 15 回完結)の授業計画である。

- 第一回 全体ガイダンス(当該学期で扱う内容のおおまかな説明)
- 第二回 日本の通訳翻訳の歴史 1(漢字の伝来から漢文訓読法の確立、江戸期の中国文学翻訳、長崎通事、解体新書など)
- 第三回 日本の通訳翻訳の歴史 2(黒船の来航と通訳、文明開化と通訳通訳、明治大正期の文学翻訳、戦争と通訳者、戦後の通訳業界など)
- 第四回 世界の通訳通訳史(聖書翻訳、仏典翻訳、会議通訳の誕生、国連通訳の歴史など)
- 第五回 翻訳者・通訳者の役割、通訳の種類(翻訳・通訳の規範と目的、逐次・同時通訳および原稿あり/なし通訳の特徴)
- 第六回 会議通訳、ビジネス通訳、放送通訳(通訳の場と求められる役割の違い、業務の特徴、仕事の始め方など)
- 第七回 コミュニティ通訳、司法通訳(同上)
- 第八回 医療通訳、手話通訳、通訳案内士(同上)
- 第九回 外国語学習と通訳訓練について(主な通訳訓練手法の紹介)
- 第十回 職業としての翻訳(翻訳業界の現状、翻訳書出版の動向など)
- 第十一回 出版翻訳と産業翻訳
- 第十二回 法務・特許等の翻訳
- 第十三回 翻訳と通訳の理論 1(通訳翻訳研究は何を扱うか、日本の通訳翻訳論)
- 第十四回 通訳と翻訳の理論 2(世界の通訳翻訳理論の概要紹介)
- 第十五回 全体のまとめ、期末試験に関する説明

以上の内容を 1 学期に詰め込み、映像資料も適宜使用するためかなり駆け足で密度が濃い授業になっている。本来なら 2 学期をかけてより詳細に講義をすべきところであるが、教養科目の概論は 1 学期で完結することを求められているため、表面的にならざるを得ない。

教材については、2013 年度までは自作のパワーポイント資料と映像教材を使用し教科書は指定していなかったが、2013 年 12 月にミネルヴァ書房から鳥飼玖美子編著『よくわかる通訳通訳学』が出版され、掲載内容が筆者のそれまでの講義内容と近いところから、2014 年度よりこれを指定教科書として使用することとした(以来、授業中に「詳しい内容は教科書を参照するように」と指示している)。

各分野の通訳業務紹介では、司法通訳・通訳案内士・コミュニティ通訳などの単元で法務省・警察庁・観光庁など政府関連機関のサイトを参照しつつ、外国人犯罪数と要通訳案件数、人口に占める外国人居住者数の変化、訪日観光客数統計データ等をアップデートして使用している。

2.2 授業の構成、教案

2.1 に示した第二回から第十四回までは全てパワーポイントで資料を作成しており、必要に応じて教科書の対応ページを参照するよう指示する。基本的にはパワーポイントを用いての講義と、関連する内容の映像資料をスクリーンに投影する形式である。大教室での百人規模の

クラスなので質疑応答は原則として行わない(過去には出席票に記入する時間を利用して質問を受け付けたことがあったが、ほとんど何も質問がないため省略した)。

毎回の密度が高い講義になるため、それぞれの区切りごとに簡単なレビューを行う。第四回に翻訳通訳史のまとめ、第九回に通訳実務のまとめ、第十二回に翻訳実務のまとめ、第十五回に通訳翻訳理論のまとめを行って記憶を喚起し、さらに期末試験の出題内容を発表する。

全ての講義内容について詳しく説明すると一冊の分厚い教科書になってしまうので巻末に講義用資料(パワーポイント)をダウンロードできるサイトの URL を示した。ご興味のある方は参照されたい。

2.3 成績評価

2.3.1 出席率は考慮しない

毎週の講義内容が過密ぎみで履修者の人数も多いため、配布・回収・集計に時間がかかる出欠チェックは行っていない(最初の二年は出席カードを配布したが、授業の最初にカードを配布するとカードに記入してすぐに教室を出ていく、最後にカードを配ると終了 10 分前あたりから教室に入って来る、途中で配るとその瞬間だけ目を醒ますといった状況で、真面目に講義を聞いている学生の妨げになり、さらに授業時間をフルに講義に充てるためにこの十年は全く出席を取っていない)。

初回のガイダンスで出席は取らないとアナウンスし、出席率が単位取得に無関係であることがわかると授業内容に興味のある学生だけが残る。その結果、例年クラス規模は履修登録者数の半数程度(100 人程度)に落ち着いている。出席を集計していないのでおおざっぱな印象だが、出席率 80~100%は 2 割、60~80%は 4 割、40~60%が 3 割、40%以下は 1 割といった感じだろうか。しかし一部の学生から出席率が全く成績評価に反映されず、試験の点数のみで評価されるのはおかしいという苦情が出ることもあるが、出席して講義を聞かないと合格できない期末試験であると話して納得させている。

2.3.2 期末試験の点数のみで成績を評価する

講義の性質から言えばレポートによる評価もできるが、かつてレポートを課した結果、出典を明らかにしないコピー&ペーストが目立ち、さらに引用元の多くが Google 検索で上位に表示されるウィキペディアやアルクのサイトであり、講義中に紹介した文献などはほとんど参照されていなかった。学生は試験よりもレポートを希望する傾向があるため、レポートを兼ねた試験の形式を工夫した。すなわち、2.2 に示したテーマごとのまとめ、さらに第十四回および第十五回の授業時に期末試験の出題内容を発表し、答案をノートにまとめておくよう指示するというものである。出題は論述問題のみとし、60 分の試験で B4 版の解答用紙にびっしりと書かなければならないため、その場で考えている間は間に合わない。教科書と自筆のノートは持ち込み可としている。問題は年度によって多少変わるが、主に下記のような形式と設問である。

問 1 翻訳通訳史、配点 25%: 事項説明(「漢文訓読と翻訳」、「長崎通詞」、「解体新書」、「明治期の文学翻訳」、「お雇い外国人」、「東京裁判」……等々について簡潔に説明する)。

問 2 通訳・翻訳の実務、配点 25%: 通訳の方法と場により異なる業務内容と求められる資

質および役割期待について、または翻訳の種類と方法について説明する。

問 3 翻訳理論、配点 50%:「翻訳はいかにすべきか」または「文学の翻訳は本質的に可能であるか」について、「ことばの意味・等価・異質化と受容化・言語使用域・テキストタイプ・スコポス理論」などの語を用いて自分自身の翻訳論を展開せよ。

問 1 と問 2 は教科書を見ながら解答することが可能だが、問 3 については事前に解答を準備せずその場で考えながら論述しても時間内に合格点の取れる答案を書き終えることはできない。また、問 1 と問 2 だけ完璧に解答しても合格点に達しない配点になっている。そこで、履修者は教員が授業期間中に発表した出題内容にもとづき事前にノートにまとめた文章を解答用紙に書き写すことになる。二度手間のようなものであるが、ノートに書くことと解答用紙に書き写すことで知識や自分の考えをより深めることができる。

2.3.3 合格率・成績分布

期末試験受験者数は履修登録者数のおよそ 80%(160~180 名)程度、授業出席者数が履修登録者数の 50%程度であることを考えると、授業にあまり出席せず期末試験だけ受ける学生も相当数いるようだ(但し、同じ学生が常に欠席しているわけではなく、出席回数は個々の学生によって異なるかと推測される)。試験の合格率は例年ほぼ 70%程度、成績分布は AA(90~100 点)5%、A(80~89 点)15%、B(70~79 点)30%、C(60~69 点)20%、C(59 点以下)30%程度となっている。大半の F 評価(不合格者)は問 3 がほとんど何も書いていないか全く見当はずれの解答であることに起因する。

2.4 授業の成果

授業評価はおおむね好意的である。履修者からは「通訳や翻訳の業務について理解が深まった」、「翻訳が日本の発展に貢献したことが理解できた」、「翻訳が単純なものではないことがわかった」等の感想が寄せられた。

この授業を担当し始めた当初は「通訳や翻訳を教えてくれる」と勘違いした学生から「期待外れだった」、「歴史などには興味がない」という反応が出たこともあったが、この数年間はそうした苦情は出ていない。但し、翻訳通訳史の講義では教室に空席が目立ち、通訳実務の紹介や外国語学習と通訳訓練について講義する回には出席が増えるなどの傾向はやはり明らかである。

3 獨協大学国際教養学部 3・4 年生向け選択専門科目「翻訳通訳論」

言語文化学科には個別言語別の「翻訳通訳論」と「翻訳通訳実習」の授業がある。春学期は「翻訳通訳論(英語・スペイン語・中国語・韓国語)」、秋学期は「翻訳通訳実習(英語・スペイン語・中国語・韓国語)」である。

大学側の定めた「翻訳通訳論(〇〇語)」と「翻訳通訳実習(〇〇語)」の到達目標は、それぞれ「(〇〇語の)翻訳通訳について基礎理論を習得し、基本的な翻訳通訳ができるようにする」および「(〇〇語の)翻訳通訳について応用理論を習得し、実務的な翻訳通訳ができるようにする」というものである。個別言語ごとに翻訳通訳基礎・応用理論を習得するとされている

が、個別言語ごとの「基礎理論」と「応用理論」が何を指すかは明らかではない。また、「基本的な通訳通訳」と「実務的な通訳通訳」についても定義されていないため、授業内容は各教員の自由裁量に任される結果となっている。このような到達目標はほとんど無意味である。これも大学の通訳翻訳学に対する認識の低さの現れであろう。

3.1 英・西・韓・中各言語の講義目的

学部の授業シラバス集に掲載された講義目的と概要は以下のとおりである(下線は筆者による、また一部を簡潔に書き換えた)。英・西・韓三言語のシラバスを見ると春学期も実質的には実践訓練が行われている。

英語: ビジネスや政治経済分野の題材を使い、通訳スキルを学び習熟させること、また、よい通訳に必要な要素を検討してそれを実践することを目指す。サイトラ、ノートテイキングの指導を行う。ペアワークによる模擬通訳を通じて学んだ通訳スキルを実践し、質の高い通訳にするために必要なことを検討する。

スペイン語: 翻訳では接続法と表現に焦点を当てる。また、スペインとラテンアメリカの歴史に焦点を当てながら翻訳者養成に有意義だとされているメモリーレッスンを試みる。伝達意図を即時につかみ、取り入れ、発表する練習を行う。通訳訓練の内容先取り訓練を兼ね行う。通訳に関しては、通訳者の役割と訓練法の説明を行い、さらに通訳技術を応用した翻訳技法を用いて課題で演習を行う。日本語訳、スペイン語訳2課題を提出する。語彙のテストを10回行う。

韓国語: 語彙力の養成と、翻訳・通訳の実践的スキルを身につけることを目的とする。さまざまなテーマを巡る実際場面での翻訳・通訳ができるように、高度な語学力の養成とスキルを学習しながら、素早い反応力と適切な表現力を身につけることができる。

中国語: 中国における翻訳研究の歴史、日中間の翻訳交流の歴史などから翻訳がいかなる役割を果たしたかを探る。伝統的な中国の翻訳理論に対する理解を深めるため、嚴復、林語堂、魯迅等の翻訳論に関して中国語原文と日本語翻訳または参考文献を併せて読む。翻訳規範および文体比較の観点から実際の翻訳作品を例にとり、日→中および中→日翻訳された文学作品の言語表現の変化を検討する。

3.2 翻訳通訳“論”とは何か

英・西・韓三言語の教員は、科目達成目標として定められた「基本的な通訳通訳」(春)と「実務的な通訳通訳」(秋)の習得を目指し演習に近い授業計画を立てている。もちろんここには学生が期待する「語学力と通訳スキルの向上」に役立つ授業を行おうとする意識が働いていることもあるだろうが、通訳翻訳で教授すべき「理論」とは何か曖昧模糊としているため何を教えればいいのか分からないことも原因になっているのではないだろうか。

通訳翻訳はもとより「理論」と「実践」が分かちがたく結びついている言語行為であるが、何を以て通訳通訳の理論とするのか、大学学部で個別言語ごとに通訳通訳理論を講じるとすればどのような内容を扱うのが妥当と考えられるかは未だに確固たる共通認識が存在しない。だ

が、上述 2 の全学共通カリキュラム「ことばと思想 1(通訳・翻訳論)」の授業計画を下敷きとして、歴史的変遷と主な歴史事件・社会における役割・業務の規範と現状・主要な考え方や理論・教育訓練の方法などを個別言語に落としこんでいくことも一つの方法であるように思える。

余談になるが、筆者は 1998 年に台湾輔仁大学で開催された学術シンポジウム「アジアにおける翻訳の伝統と現代」ⁱⁱⁱに参加し、孔慧怡「中国の翻訳の伝統における特色」、楊秀芝「朝鮮時代の漢語翻訳官」、Judy 若林「近世日本の翻訳における使命」劉宓慶「中国の翻訳理論研究の方向性」、Thanomnuan O'charoen「タイの翻訳通訳の伝統」、蔵仲倫「戦後中国の社会経済の転換と翻訳」、Wong Fook Khoon「マレーシアの翻訳、通訳」等の研究発表を興味深く聴講した。各国の翻訳通訳研究者が史学、哲学、社会学的な研究を行っていることに深い興味を覚えたことが現在の自分の授業に影響を与えているのかもしれない。

3.3 「翻訳通訳論(中国語)」

上記のような考え方から出発した「翻訳通訳論(中国語)」の具体的な授業内容について以下にやや詳しく紹介する。

3.3.1 履修者の特徴、クラス規模

言語文化学科の中国語選択 3 年生以上が対象となる。今年度の履修者は 10 名(3 年生 9 名、4 年生 1 名、女子 9 名、男子 1 名)であった。例年、初回のガイダンスには大勢の学生が集まるが学習内容を説明すると半減する。今年度も 20 名の学生がガイダンスに出席し、実際の履修登録者数は 10 名であった。秋学期の「実習」のみ履修する学生が存在することから、「語学力向上に役立たない」と敬遠された可能性もある。

3 年生の中国語学習時間数は 2 年次までに 312~336 時間(週 4 コマ×13~14 週×4 学期)で、学習時間から見た語学力は中国語検定 3 級、HSK3 級(基本的な文章の読み書きと簡単な日常会話ができ、生活・学習・仕事などの場面で基本的なコミュニケーションが取れ、中国旅行の際にも大部分のことに対応できる)程度である。但し、語学力で選抜するクラスではないため、中国語の能力には個人差が大きく、長期留学を終えて帰国した学生から基本的な語彙や文法事項が身につけていない学生までが混在している。このクラスを履修する以前に実際に翻訳を学んだことがあるのは永田ゼミの学生 3 名であった。したがって、本格的な翻訳訓練が行えるような言語運用能力は期待できない。

3.3.2 「翻訳通訳論(中国語)」授業計画と概要

大きな柱として、(1) 中国の翻訳の歴史と理論についての理解を深める、(2) 実際の翻訳作品を素材として比較や分析を行う、(3) 短い文章の翻訳実習を行い既存の翻訳と比較する^{iv}、という順序で計画を立てた。以下に今年度の授業概要を述べる。使用した教材資料については文末注にまとめた^v。

(1) 中国翻訳史、日中間の翻訳交流の歴史、中日翻訳が日本の発展に果たした役割について講義し(論文コピー配布、ppt スライド、口頭説明、板書、DVD 放映)、中国の代表的な翻訳論(嚴復、林語堂、魯迅など)を紹介する。中国語原文と日本語訳文、または参考文献を用い

る。中国翻訳史および中国の翻訳論に関する講義内容を整理して簡潔に述べたレポートを提出する(大学指定レポート用紙表面に翻訳史、裏面に翻訳論に関するまとめを論述)。

(2) 中国語→日本語訳の例として竹内好(1955)^{vi}、高橋和巳(1973)^{vii}、藤井省三(2009)^{viii}の翻訳による魯迅の短編小説集のあとがき・訳者解説・訳注から翻訳によって異なる翻訳規範を考える。さらに原文と翻訳作品『故郷』を読み比べ、訳文の表現の違いおよび翻訳者がどのような狙いをもって訳出したかを探る。それぞれの翻訳に対する考え方と表現の特徴は表形式に整理して板書する。

つぎに、日本語→中国語翻訳の例として『海辺のカフカ』の一部分の林少華訳と頼明珠訳を読み合わせる。今年は無意味な文など難訳箇所が多い第十章を選んだ。最初に日本語原文を配布した。以下に冒頭部分を引用する。

「それで、このナカタが、あなたのことを、カワムラさんと呼んでも、よろしいのでありますね?」ナカタさんはその茶色の縞猫に、もう一度同じ質問をした。ゆっくりと言葉を切って、なるべく聞き取りやすい声で。

その猫は自分はこの近くでゴマ(1歳、三毛猫、雌)の姿をみかけたことがあると思うといった。しかしながら猫は——ナカタさんの立場からすればということだが——かなり奇妙なしゃべり方をした。猫の方にも、ナカタさんのしゃべっていることはもうひとつ理解できないようだった。そのおかげで彼らの会話は往々にしてすれ違い、意味をなさなかった。

「困らないけど、高いあたま」

「すみません、おっしゃっていることが、ナカタにはよくわかりません。申し訳ありませんが、ナカタはあまり頭が良くないのです」

「あくまで、さばのこと」

履修者に「自分が翻訳するとしたら難しいと思う箇所はどこか」を尋ねると主に上記の下線部および網掛け部をあげた。以下のとおりである。

・「中田」、「川村」ではなく「ナカタ」、「カワムラ」と片仮名を使っているが目標言語の中国語には漢字しかない。どうすればその違いを表せるか。

・ナカタさんの「～のでありますね」、「おっしゃっている」などの丁寧表現を用いる特徴のある話し方を中国語で同じ感じに訳せるだろうか。

・網掛け部分のような意味が分からないセリフは訳しにくい。

起点言語テキストで「翻訳の際に問題になりそうな箇所」を自由に指摘させ、日中翻訳において伝達が難しいと思われる「表記・表現・意味」について簡単に話しあった後に、林訳・頼訳および英訳も参照用として配布し、当該箇所の訳文を確認した。その後、全体を俯瞰しながら原文と二種類の翻訳を比較した。

中→日、日→中の起点・目標テキストを材料として、「Domestication(受容化)」と「Foreignization(異質化)」をキーワードに自分が翻訳者/読者なら、どちらを支持するか考え、「翻訳はいかにすべきか」について自分なりの主張をまとめてレポートを提出させた。

(3) 魯迅『一件小事』(小さな出来事/小さな事件)のローマ字ピンイン付き中国語原文テクス

トを配布し、授業中に物語全体のあらすじを解説する。①冒頭の場面設定と情景描写、②主人公の乗った人力車が老女を引っかけて転ばせる場面、③老女と車夫のやりとりおよびそれを見る主人公の心理描写、④老女をつれて派出所に向かう車夫と彼の背中を見つめる主人公、⑤巡査と主人公のやりとりおよび自らの行為を反芻する主人公の自問自答、⑥かつて起こった「小さな出来事」がその後の主人公に与えた影響についての述懐、の6場面において段落ごとに口頭で説明し、最後に原文で読解できない箇所を質問させ、次週までに全文を日本語に訳してくるよう指示した。翌週、各自が自分の翻訳を持ち寄ったところでランダムに指名し訳文を読み上げさせ、学生どうして訳出を比較する。その後、(2)で読みやすいと評価した人数が最も多かった竹内好訳のコピーを配布し、特に翻訳が難しく感じた箇所をどのように処理しているかを確認した。まとまった文章とはいえ、原文文字数で1000文字程度の小品なので、さほど負担にならず作業を行うことができた。

3.3.3 履修者のレポートから

以下に履修者が提出したレポートから、印象に残った部分を抜き出して紹介する。

3.3.3.a 中→日翻訳比較

以下は「自分の訳文と出版された訳文の比較、および三種類の翻訳を比較せよ」という課題に対して履修者が提出したレポートの一部を抜き出したものである。

自分の訳文と翻訳者の訳文を比較

- ・自然な文章で情景描写をするのが難しい。自分の感性で言葉を付け加え情景が頭に浮かぶような意識をしたほうが良いと思った。
- ・自分の訳文は直訳で表現力に欠け不自然な訳が多く、日本語らしくないしわかりにくい。
- ・自分の訳では第三者が説明しているようだが、三人の翻訳は全て主人公の視線で書かれている。
- ・自分は辞書で見つけた訳語をそのまま使ったら言葉遣いが硬かったり、いきなりフランクになったりして統一性に欠けてしまった。
- ・自分の翻訳のほうが現代風な言い回しで読みやすいと思った。

代表的な三種類の翻訳を比較

- ・三人が思い描く登場人物のキャラクターが会話の部分によく表れている。セリフの訳し方でその人がどんな人間か読者の印象が変わると思った。
- ・同じ文を訳していても文の長さ(文字数)が違う。藤井は長い文に訳すのはわざと読みにくくするためと言って実際にそう訳している。
- ・高橋訳は硬い漢語を多く使っていて違和感がある。今の時代の読者には読みにくい。
- ・主人公の一人称が「私」と「僕」で印象が違うし、セリフの口調も違う。
- ・タイトルが「小さな出来事」と「小さな事件」で異なるので読み始める前から印象が違ってくる。「事件」のほうが深刻な感じがする。
- ・自分は三種類の訳文に大きな違いを感じなかった。
- ・竹内訳には漢字で書けるのにあえて平仮名を用いている箇所があって、なぜそのようにした

のか疑問に思った。

・藤井訳で「子曰く詩に云う」を「孔子様はおっしゃった」と訳すとわかりやすすぎて原文の威厳がなくなる。自分では「異質化」で訳すと言っているのに訳文は「受容化」している。

3.3.3.b 日→中翻訳比較

以下は「二種類の中国語訳を比較して感じたこと、自分ならどう訳すかについて自由に述べよ」という課題に対して履修者が提出したレポートの一部を抜き出したものである。

- ・同じ原文でこんなに違う訳になるとは翻訳は思ったより自由だと思った。
- ・林訳の中国語そのものを尊重する姿勢は素晴らしいが、翻訳は他国の文化を伝える役割があるので、原文独自の表現を無視すべきではないと思う。自分の文化を尊重するなら、他国にもそれと同じように自国の文化を愛し自国の文学の文体や独特な言語表現を広めたいと思っている人々がいることを念頭に置いて訳すべきだ。
- ・二種類の翻訳を読んで、自分なら読者の受容しやすさと原作者への忠実のどちらを重視するかで悩んだ。自分自身の新たな作品としているような林訳より原文・原作者により忠実に訳している頼氏が望ましいと思ったが、一方で『一件小事』の藤井訳が魯迅の言う「硬訳」的で読みにくかったことを考えると迷う。だが、読者は外国の作品を読む時に、その読みにくさや母語とは多少異なることは承知しているはずだ。その国の文学そのままの訳が読みたいので原作に忠実な翻訳への期待や需要はなくならないと思う。非常に難しいが、忠実さと読みやすさを兼ね備えた翻訳ができれば面白いだろうなと思った。
- ・翻訳者はメッセージをとらえる理解力が必要なのだと思った。翻訳者が前面に出て自分の文章で訳したとしても(翻訳者の可視性)、テーマやメッセージを伝える役割さえ損なわなければ原作者に対する冒涇にはならないと考える。だが、異質化にしても受容化にしても、翻訳にはやはり限界があると思った。翻訳者は自分がどのような心構えで訳すか、翻訳に取り掛かる前に作品を吟味し翻訳の仕方を決めるべきだと感じた。
- ・自分が訳すなら林訳のように読みやすさを重視して流麗な翻訳をしたい。文字通りの翻訳をしただけでは読者に親しみを感じさせないし、文章としても見栄えのよいものにならないからだ。翻訳には決まったルールがないので、読者一人一人によって良い翻訳は違う。自分が海外文学の翻訳を読むときは好みに合ったものを選んで読みたい。
- ・自分は原文に忠実な頼さんのように訳すと思う。原作者は有名な作家で、日本語が読めない外国人でもその作家のファンからすれば、文章の特徴や「どんなふう書いてあるか」が知りたいと思うからだ。作品のメッセージだけ手際よく伝えればいいのか、外国語の雰囲気や繊細に伝えることを目指すのか、翻訳者によって認識の違いがある。私はただ原文に忠実というより、その訳文が訳出された言語の読者にどのように受け入れられるかを考えて慎重に訳さなければならぬことを学んだ。
- ・自分の個性を強く出したら、それは「私の作品」になって翻訳とは言えなくなってしまう。いちばん大切なのは、原作者はどのような文章を書く人なのかを知らせることだ。忠実に訳して多少違和感があっても読者に受け入れられれば作者にとっては嬉しいのではないだろうか。
- ・最初は書いてあるように忠実に訳すべきだと思った。だが、実際に訳文を比較してみると一

見自分勝手に訳しているような林訳のほうが原作の雰囲気再現しているように思えた。頼訳は文や語の意味だけ考えて訳したようにも見える。実際に世界観が再現されているのは林訳だと思えるのは役者の言語能力に差があるからだろうか。四字熟語を多用して硬く訳していることで村上春樹の難しい世界観を表現できているのかもしれない。正解がないというのが翻訳の面白さ、翻訳者にとってのやりがいになるんだと思った。原作を原語で読みたいと思わせるほど作品を好きになってもらうことが翻訳のゴールになりえると私は考えた。

3.3.4 レポートに対する所感および「翻訳通訳論(中国語)」の今後の指導

翻訳通訳史:履修者はこのパートにはあまり興味を示さず、授業内容をまとめたレポートからも理解度がさほど高くないことがうかがえた。盛りだくさんな内容を短い時間に詰め込み過ぎたことも影響し、仏典翻訳・清朝朝廷における公文書翻訳・明清時期の宣教師による翻訳・清朝末期の洋務運動と翻訳などの流れがしっかりとつかめていないものが多かった。詳細な説明をするよりも、もう少し単純化したほうが歴史の流れをとらえやすいかもしれない。清朝に仕える宣教師カスティリオーネを扱ったドラマ「宮廷画師 郎世寧」の一部を見せた回は比較的好評であったことから、来年度は19世紀末期租界の状況を説明するために買弁商人が登場する「買辦之家」(2003年中国)を参考程度に使うことも考えられる。

翻訳論:嚴復、魯迅、胡適、林語堂などよく知られている伝統的な翻訳論を紹介した。この部分は手厚くして新しいものも取り入れたいが、現代の基礎理論は中国独自のものというより欧米の理論をベースにしたものがほとんどである。日中翻訳に特化した記述的研究を紹介するのも一法であろう。

翻訳比較と翻訳実習:具体例を示すと興味を引くようである。実際に自分で翻訳を行うことについては面倒がられるのではないかと心配したが、意外に熱心に取り組み、翻訳に対する興味がうかがえた。自分の訳したものと実際に出版されている翻訳とを比較して様々な発見をしたようだ。『海辺のカフカ』については今回初めて英訳も配布したところ学生も興味を持った。

かつて、翻案の例として、芥川龍之介の『杜子春』と鄭還古の『杜子春伝』や中島敦の『山月記』と唐代説話『人虎伝』を読み合わせたことがあった。大変よい内容で最終的には学生も面白く感じたようだが、白文(訓点なし原文)→漢文(訓点付き漢文)→読み下し文(訓読した漢字かな混じり文)→解釈→日本語訳と段階を追って読む伝統的な教え方をしたため、漢文に親しんだことのない履修者は途中で疲れ気味になり、指導にも手間がかかりすぎた。この素材を扱うならすでに現代語に訳されたテキストを利用するのが現実的だという結論に達した。

3.4 「翻訳通訳論(〇〇語)」の今後の指導について

さて、「翻訳通訳論(中国語)」の実践報告にかなりの紙幅を割いてしまったため読者の印象も薄れていると思うが、ここで3および3.1に話を戻そう。筆者が個別言語での「翻訳通訳論」に興味を持ったそもそものきっかけは3.2で述べたシンポジウム「アジアの翻訳の伝統と現代」であった。その後、大阪外国語大学(現大阪大学外国語学部)大学院で夏季集中講義を行った際に、母語が様々に異なる学生が参加していることを知り、それぞれの母語の「翻訳通訳

史における重要なトピックスあるいは現代の翻訳通訳にかかわる重要な問題について調べて発表する」という課題を与えたことがある。その結果、各個別言語を母語とする学生から非常に面白い内容の話を聴くことができ、学生どうしだけでなく教員も大いに啓発された。

そのような経験から、獨協大学国際教養学部の専門選択科目「翻訳通訳論(〇〇語)」が設置された時、英・西・中・韓各言語横並びで翻訳通訳をめぐる大まかな歴史の流れや伝統的な翻訳論を紹介する授業が展開されれば学術的にも価値のある試みになるだろうと考えた。それ以来数年間、試行錯誤しながら「翻訳通訳論(中国語)」の授業を行ってきたわけであるが、必ずしも思うような結果は出ていない。今年度は例外的に 10 名の履修者が集まったが、少ない年度では 3 名、平均すれば 5~6 名だろうか。ゼミよりも圧倒的に少ない人数でちろんまりと授業をしている。初回のガイダンスで興味を失う学生が半数以上、どうにか過小科目にならないで済む程度の不人気科目なのだ。全学向けの「通訳翻訳論」でも歴史篇と理論篇では出席者数が落ち込む現象があり、大学生は歴史や理論には興味を持たないと言えるかもしれない(秋学期の「翻訳通訳実習」には割合に多くの学生が集まる)。学生のニーズに对应していないのであれば、英・西・韓に習って春・秋学期ともに言語の運用力を向上させることを主眼とした内容に変えようかと何度か迷ったこともある。しかし、主に以下の三つの理由から基本的な方向性を崩さずにシラバスを作り続けている。

第一に、翻訳通訳論を教養科目として提供したい、ということ。目先の役に立たなくとも知らず知らずのうちに物事の考え方そのものに影響を及ぼし、新たな視点を獲得する機会を無駄にするのは惜しい。ましてや国際教養学部は一年次と四年次に「哲学」を必修科目に定めている教養重視の学部である、実務一辺倒と思われがちな翻訳通訳にも学問は存在することを示したい。

第二に、通訳翻訳の訓練はゼミですで行っていること。筆者の担当する「翻訳通訳の実践訓練」ゼミは 2 年生から 4 年生まで定員いっぱいの学生が集まる人気ゼミのひとつだ。ゼミでは日←→中通訳翻訳のスキル強化のために、逐次・同時の通訳訓練やさまざまなジャンルのテキストを用いた翻訳練習を行っている。さらに卒業制作として書籍や連続ドラマの字幕などの翻訳を指導しているので、同じようなことを他の授業で繰り返す必要がない(ゼミでの指導内容は参考文献「外国語学習者から翻訳者へ」に詳しい)。

第三に、現実的な理由になるが、大半の履修者の語学力は本格的な通訳や翻訳を行うには不足していること。一部には高校時代から中国語を学習している者や長期留学から帰国した者などかなり高い語学力を持つ履修者もいるが、ほとんどは翻訳の前提である原文を正確に理解する読解力を習得できていない。まだ中途半端な能力しかない第二言語を無理に読ませるよりは、中国語があまり読めなくてもクラスに参加できるよう母語で書かれたものを中心に講義を行いたい。なお中国語を母語とする学生がいる場合は講義用資料も日中両国語で配布している。

結局、「翻訳通訳論(中国語)」は多少のマイナーチェンジをおこなうかもしれないが、来年度も不人気科目であることを覚悟でこれまでと同様の授業を行うことになるだろう。

4 最後に—「大学における通訳翻訳教育」

以上、筆者が大学学部で担当している全学共通カリキュラム「ことばと思想1 通訳翻訳論」および学部専門科目「通訳翻訳論(中国語)」についてかなり詳しく紹介してきた。獨協大学では外国語学部各学科(ドイツ語・英語・フランス語・交流文化)と国際教養学部言語文化学科の全てで通訳および翻訳を科目名に冠した演習の授業が行われている。インターネットの進学ガイドサイト^{ix}で検索すると「通訳を目指せる大学・短大」は日本全国に128校もあるらしい。単に二か国語ができさえすれば通訳や翻訳など教わらなくても自然にできる、大学で通訳や翻訳を教える必要はない、という考え方が改まったなら喜ばしいことである。通訳翻訳を教えるようになったのは学生の実学志向を反映しているだろう。通訳翻訳は「語学力を活かせる仕事」であり、通訳を科目名に冠したクラスを用意すれば学生に歓迎される。だが、会議通訳・放送通訳等の現場を知っており、実務翻訳・エンターテインメント系の翻訳等で収入を得たことのある大学教員がどれほどいるのだろうか。128校もの大学でプロ通訳者(現役か否かを問わず職業として通訳を経験した者)が教鞭をとっているとは考えにくい。大学で教えるためには最低でも修士の学位と研究論文の提出が求められる。多くの優秀なプロ通訳者や産業翻訳者が「学位」と「論文」の採用条件を満たせないために非常勤であっても大学で教える機会を得られず、また修士課程を修了していても通訳翻訳の実績は学術業績として認められない^xのが通常である。

そこで「院生の頃にアルバイトで通訳を頼まれたことがある」、「海外留学中に日本からの旅行者を案内したことがある」、「学術論文などを何篇か翻訳した経験がある」教員が通訳翻訳を指導することにもなる。通訳翻訳の実践現場でプロとして働いた経験を有する者だけが指導すべきだとまでは言わないが、通訳翻訳を研究したことも現実の通訳翻訳市場に足を踏み入れたこともない教員が「実務的な翻訳通訳ができるようになる」という科目達成目標を掲げた科目を教えるのはいささか問題であるし、なにより教員自身も専門外の授業を担当させられることには積極的になれないだろう。

昨今では日本の大学院で通訳翻訳研究によって学位を取得し、職業として通訳翻訳を経験したことのある大学教員が次々に大学で専任教員に採用されるようになった。これらの教員が(1)第二言語の運用力を向上させる目的で通訳訓練手法を導入する授業と(2)通訳翻訳の実践的な能力を養成する授業に加え、(3)学問としての「通訳翻訳学」を講義する教養科目にも責任を持って積極的に関わっていくことで自律した学問分野としての地位を固め、教育を通じて通訳翻訳が「語学力を活かせる仕事」以外の広がりを持つ魅力的な学問領域であることを伝え、さらに将来の通訳翻訳ユーザーに正しい認識を持たせることができると考えている。

.....

【著者紹介】永田小絵(Nagata Sae) 獨協大学国際教養学部言語文化学科准教授、中国語会議通訳者・翻訳者。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得満期退学。最近の翻訳に『中国再考』(葛兆光著、2014年岩波文庫、2015年度アジア太平洋賞受賞)、『逐次通訳のノート——芸術家のツール』(2016年、獨協大学国際教養学部紀要マテシス・ウニヴェルサリス第18巻第1号)がある。国際会議の同時通訳実績多数。

.....

【注】

i 例年の履修登録者数は 200 名前後、実際の出席者数は 100 名前後とみられる。期末試験はほぼ 80%程度が受験している。

ii 獨協大学は文系総合大学で外国語学部(ドイツ語・英語・フランス語・交流文化学科)、国際教養学部(言語文化学科—英語と西・中・韓いずれかの二言語併修)、経済学部(経済・経営・国際環境経済学科)、法学部(法律・国際関係法・総合政策学科)の 4 学部 11 学科からなる。

iii シンポジウムの日程と一部の発表内容は以下のサイトを参照されたい。

<http://nikka.3.pro.tok2.com/simpo.html>

iv この部分は年度によっては唐代伝奇の『人虎伝』と『山月記』および『杜子春伝』と『杜子春』を比較することで、「原作と翻案」について理解を深める授業を行うこともある。

v 孔慧怡「中国の翻訳の伝統における特色」

<http://nikka.3.pro.tok2.com/konghuiyi.htm>

永田小絵講義資料「翻訳と通訳の歴史」

<http://nikka.3.pro.tok2.com/2005b01.pdf>

永田小絵「中国清朝における翻訳者および翻訳対象の変遷」

http://jaits.jp.org/home/kaishi2006/pdf/13-14%20Nagata_Edited.pdf

永田小絵「『信達雅』をめぐる中国近代の翻訳論」

<http://nikka.3.pro.tok2.com/cino.htm>

永田小絵「中国翻訳史における小説翻訳と近代翻訳者の誕生」前編・後編

http://honyakukenyu.sakura.ne.jp/shotai_vol1/05_vol1_Nagata.pdf

http://honyakukenyu.sakura.ne.jp/shotai_vol2/04_vol2_Nagata.pdf

連続ドラマ「宮廷画師 郎世寧」(清朝に仕えた宣教師の物語)

<https://www.youtube.com/watch?v=RKEwyDGH3Ko>

林語堂「翻訳を論ず」永田小絵訳

<http://nikka.3.pro.tok2.com/linyutanglunfanyi.htm>

永田小絵・平塚ゆかり「翻訳者の内的世界における再構築としての翻訳

— 村上春樹『海辺のカフカ』の翻訳を例に —

<http://jaits.jp.org/home/kaishi2009/pdf/16-nagata-hiratsuka.pdf>

vi 竹内好訳『阿 Q 正伝・狂人日記 他十二篇(呐喊)』岩波文庫 1955 年

vii 高橋和巳訳『呐喊』中公文庫 1973 年

viii 藤井省三訳『故郷／阿Q正伝』光文社古典新訳文庫 2009 年

ix リクナビ進学

http://shingakunet.com/shigoto-search/keito_cd010/category_cc120/shigoto_c1110/?koshuCategoryLCd=010

x 筆者が専任教員に応募した際にフリーランス会議通訳者の稼働実績と実務翻訳実績は全て削除するよう要求され、職歴にフリー通訳者と書かないように指示された。

【引用文献】

村上春樹 (2005) 『海辺のカフカ(上)』新潮文庫

【日本語参考文献】

アンソニー・ピム(武田珂代子翻訳) (2010) 『翻訳理論の探求』みすず書房

ジェレミー・マンデイ(鳥飼玖美子監訳) (2009) 『翻訳学入門』みすず書房

津田守(2005) 『世界の大学・大学院における通訳翻訳学プログラム』平成 16 年度特別研究費
「世界の大学大学院における通訳翻訳教育、トレーニング、研究についての調査・比較研究」
報告書 大阪外国語大学

津田守(2007) 『世界の大学・大学院における通訳翻訳学プログラム 続』平成 18 年度特別研究
費Ⅱ「世界の大学大学院における通訳翻訳教育、トレーニング、研究についての調査・比較
研究」報告書大阪外国語大学

永田小絵(2014) 「外国語学習者から翻訳者へ」 『獨協大学国際教養学部紀要マテシス・ウニウエ
ルサリス』 第 15 卷 2 号 169～187 頁 <http://tuuyaku-honyaku.my.coocan.jp/kiyo2014.pdf>

モナ・ベイカー ガブリエラ・サルダーニャ(編集) (藤濤文子(監訳)・伊原紀子(翻訳)・田辺希久
子(翻訳)) (2013) 『翻訳研究のキーワード』研究社

フランツ・ポエヒハッカー(2008) (鳥飼玖美子監訳) 『通訳学入門』みすず書房

【中国語参考文献】

楊承淑編(2000) 《亞洲翻譯傳統與現代動向》 (Translation in Asia: Past and Present) 北京大學
出版社 ISBN:9787301039250

劉宓慶(1993) 《當代翻譯理論》書林出版有限公司 ISBN:9575863771

劉宓慶(2000) 《翻譯與語言哲學》書林出版有限公司 ISBN:957586848X

劉宓慶(2006) 《口筆譯理論研究》中國對外翻譯出版公司 ISBN:750011155X

【資料(講義用資料)】

全学共通カリキュラム ことばと思想1(通訳翻訳論)

国際教養学部言語文化学科 選択専門科目 翻訳通訳論(中国語)

<http://tuuyaku-honyaku.my.coocan.jp/>